



## インフルエンザの菌とウイルス

龍谷大学の糟野先生からバトンを引き継ぎました、産業技術総合研究所の青木です。糟野先生とは、お互いの専門分野の一つが電気化学ということもあって、当グループに在籍されていた頃からの付き合いですが、まさに「元気いっぱい」という言葉そのものの方だと思います。その元気いっぱいのバトンを引き継いだ私ですが、元気の点で勝るとも劣らないのが執筆時現在で10ヶ月となる我が家の娘です。

我が家の娘は最近、ますます目が離せなくなっています。見るものすべてに興味を持ち、さらにつかまり立ちを卒業し日に日に歩ける歩数が増えていく時期に差し掛かったこともあって、非常に活発です。休みの日などに家にいると、娘が興味を示す小物類を先回りして除去するのに振り回されます。特に、テレビのリモコンとティッシュボックスには興味津々で、こちらが気を抜いて傍らに置いていようものなら、遠くからでも目ざとく見つけて、ものすごい速さの這い這いで奪取しようとします。これらの小物を手の届かないところに置きホッとしていると、やけに静かに一人遊びをしていることがあります。心配になって振り返ると、転倒事故防止用に床に敷き詰めたコルクマットの端を剥がしては口に入れて楽しんでるわけです。こうなると、這い這いの練習はさておき安全第一ということで、ベッドの中でしばらく遊んでいてね、ということになります。そんなことが、食事のとき、おむつ交換やお着替えのとき、お風呂のとき、寝るとき、と続くのです。私が普段職場にいるときは家内一人で子供の世話をしているわけですから、その努力と根気に脱帽しないわけにはいきません。

そんな活発な時期の子供には、やはり予防接種は欠かせません。予防接種はある一定期間以上の間隔を開けて受ける必要があるので、スケジュールリングが大切です。そのため、出生時にもらった手帳や案内を熟読し、生後3ヶ月から三種混合、ポリオ、BCGのそれぞれを必要回数接種を行い、あとは1歳の誕生日に風疹・麻疹のワクチン接種を残すのみ、と思っていたら、落とし穴がありました。Hib ワクチンです。Hib ワクチンのHibはインフルエンザ菌b型のこと、細菌性の髄膜炎を引き起こす原因菌となっています。特に乳児では重篤な症状を引き起こす可能性があることから、諸外国では通常の予防接種の一つとして受けられてきました。しかし、日本では本ワクチンの認可が遅れ、2008年の12月になってようやく任意接種が一般的に可能となったのだそうです。みなさんご存知のように、今話題の新型インフルエンザなど、流行性感冒を引き起こす病原体はウイルスです。ここで問題となっているインフルエンザ菌b型は、インフルエンザに似た症状を示す菌ということで名付けられた名称だそうです、何ともややこしい。私も最初の予防接種の頃、病院の窓口でワクチン接種に関する

問い合わせの会話を耳にし、何を勘違いした話をしているんだろう、と思っていました。インフルエンザはウイルスだし、それに生まれて数ヶ月の子には免疫の点であまり意味がないし。いわゆる流行性感冒の方のワクチンのことかと思っていたのです。思えば、子供の出生直後に認可されたワクチンなので、出生時にもらった手帳などには書かれていなかったのです。この認識の甘さが仇となりました。ママ友の間で話題となって危機感を感じた家内が調べてくれました。とにかく思いつく病院に片っ端から電話したところ、ワクチン入荷に半年かかる病院から果ては未定の病院まで、かなりの品薄状態だとのことでした。今まで認可が下りなかったワクチンだけに予約が殺到していること、1歳までに免疫をつけようとすると3回から4回受けねばならないこと、などが理由でしょうか。いくつか電話をしてみても分かったのは、大きな病院よりも小さな診療所のほうが予約しやすいことです。意外と穴場なのかも知れません。結局近所の診療所に予約して、2ヶ月後に受けることになりました。インフルエンザ菌b型、歴史的な経緯で定着した名称とはいえ（病原体の名称をはじめ、この手の紛らわしさは世にごまんとありますが）、何とかならないのでしょうか。

このように、子供が生まれたことで、今まで気にも留めなかったようなことが目に耳に入ってくるようになりました。テレビ番組や書店で脳科学の関係者が「0歳児にはこれを教材に」などと発言しているのを目にすると、すぐに試してみたくくなります。我が子を使って実験というわけではありませんが、良いものなら試したくなるのが親心といったところでしょうか。ただ、日本脳炎ワクチンの副作用による死亡例が数年前に報道されて以来、その他のずっと副作用の少ない予防接種まで控えてしまう親御さん方も増えているようです。我が子を副作用から守るためとのことですが、それは過剰反応というものでしょう。当たり前の感染症が当たり前のように流行しないのは、予防接種による個人個人の免疫獲得が背景にあるからです。もちろん、リスクとベネフィットの両方を考慮するのは言うまでもないことです。執筆時の今は、新型インフルエンザの流行を抑えた9月。0歳児の親はワクチン接種が優先されると聞いていますが、ワクチンの安全性や数の確保を含め様々な点をクリアしてからとのこと、もう少し時間が掛かりそうです。

今回のリレーエッセイ執筆者は、この6年間懇意にさせていただいている北見工業大学の兼清泰正先生にお願いしました。北の大地で精力的に活動されている新進気鋭の研究者、兼清先生の情熱あふれるエッセイに乞うご期待です。

〔産業技術総合研究所環境管理技術研究部門 青木 寛〕